論説委員が聞く　考える広場

フランス流の「自由」の論理とは

壊れやすいから守る

パリの風刺週刊紙「シャルリエブド」の本社で一月に起きたテロ事件をきっかけに、「表現の自由」をめぐる論考があふれています。フランス独特の「表現の自由」至上主義への疑問も聞かれますが、はたしてその歴史的な経緯や、表現の自由の「本質」は十分に理解されているでしょうか。同国出身でエッセイストのドラ・トーザンさんとともに考えました。

（聞き手・久原穏）

久原　事件を振り返ると、日本では表現の自由か、宗教への冒瀆かといった論点で語られることが多いように感じます。「テロは許されないが、イスラム教徒が崇拝するものを嘲笑するのは、表現の自由にかを借りた冒瀆だ」「フランス人が表現の自由を絶対視したり、「私はシャルリ」の標語を掲げ、異論を許さないような空気には違和感を覚える」といった声も聞きます。フランス人の考え方とは根本的に異なると思いますが。

トーザン　表現の自由や風刺文化、宗教や移民問題が絡み合い、日本人に理解しにくい問題なのは確かです。分かってほしいのはフランス人にとって「自由」は最も大事で、大切にしているものだということ。表現の自由は基本的な人権の一つで、尊重しなければならないとの考えはフランス人のDNAに脈々と受け継がれています。他の国とは違う。

ちょっと教科書のような説明になりますが、自由は絶対王制や教会権力によって制約されていました。ルソーやモンテスキューら十八世紀の啓蒙主義の時代を経て、近代市民の手で獲得したものです。フランス革命時の人権宣言（一七八九年）で「人は生まれながらにして自由、平等である」とし、一一条で「自由に話し、書くことは人にとっての最も貴重な権利の一つ」とうたっています。それは戦後の世界人権宣言や日本国憲法にもつながった考えです。でも、日本は今、物が言いにくい雰囲気で、全然自由ではないと思います。

久原　それは感じます。フランスの歴史的な重みは理解できますし、ヴォルテールの言葉とされる「私はあなたの意見には反対だ。しかし、それをあなたが言う権利は死んでも守ろう」といった考え方も分からないではない。それでも「シャルリ」のやり方や、それを支持するフランス人の異常な「執着」は日本人には受け入れにくいです。

ドラ・トーザン（Dora Tauzin）　パリ出身。ソルボンヌ大、パリ政治学院を卒業。国連勤務後に来日、慶応大講師などを経て、日仏の懸け橋となるべく執筆、講演活動を行う。コメンテーターとしても活躍。『ママより女』など著書多数。

トーザン　あそこまで執拗に風刺画を掲載し、ムスリム（イスラム教徒）の崇拝する預言者ムハンマドをばかにして笑えるのかと私も考えます。でも「あれはダメ」「これも話せない」と我慢するとか、気を付けましょうと忖度したら終わり。何でも自由に話し、書くことができるのは本当に尊い権利です。なぜ自由が最も大事か。それは壊れやすいもの、守らなければ簡単に失いかねないものだからです。せっかく手にした自由も、ナポレオン三世の治世下では新聞や書物の発禁処分が横行しました。

久原　そう言われて思い出したことがあります。寓話『茶色の朝』で無関心がファシズムの台頭を許すと警告した作家、フランク・パブロフ氏を取材した時です。「民主主義は壊れやすい花瓶のようなもの。小さなひびでも放っておくと、いつの間にか割れてしまう。常に気を配る必要がある」と話してくれました。私たちが社会に不自由さや息苦しさを感じたら、無関心でいるのではなく、自由を守るために声を上げる行動が必要だと、だとしても、「私はシャルリ」で一色となるのは不思議です。

久原穏論説委員

トーザン　シャルリエブドは下品だし、表現は挑発的、過激すぎると分かっている。左派の人でも買う人は少なく、普通の人は読みません。通常の発行部数は三万とか四万程度でしたが、テロ直後の号は五百万部も売れた。大嫌いな人でもシャルリをかばった。それはフランス人にとって宝物である「表現の自由」を守るため、失ってはいけないから。表現の自由の問題にタッチされる（触れられる）と、反応してしまうのです。

シャルリは広告を載せないし、もちろん国の支援もない。あらゆるものから独立し、自らの責任で自由にやっている。結局、自由を主張する以上、自ら責任を負っているのは立派です。

久原　表現の自由も無制限ではなく、人種差別やテロをあおるのは禁じられています。フランスでは数年前に、宗教の風刺は罪に問われないという判例が出ていますが、別者であるムスリムの心のよりどころであるイスラム教を風刺すべきではないという声は、フランスの知識層からも聞かれます。

トーザン　宗教の悪口は裁判で問われません。イスラム教だけでなくカトリックもユダヤ教も風刺の対象にしますし、自由を制限する権力すべてを対象にします。権力には抵抗し、デモをする。人と意見が違うことを良しとする国です。自由な個人の幸せを優先するのがフランスで、これに対し日本は皆が幸せだったら個人も幸せになるという考え方だから、正反対の国民性だと思う。

コラージュ・河内誠

エッセイスト　ドラ・トーザンさん

久原　あなたは日本とフランスを往復する生活を始めて十五年以上ですが、私もフランスで四年間の勤務経験がありますが、いまだ互いに理解しにくいことは多い。あらためて「表現の自由」の本質とは何か、風刺の役割とはを問いたい。

トーザン　言論や思想はあらゆる権力の影響下を離れ、自由でなければなりません。ですが宗教は教義で自由を奪いますし、ある宗教にとって禁じられていることを信者以外の人にまで強いるならば自由を侵すことになります。そうであれば宗教権力を批判し、抵抗する。でも個々の教徒ではなく、あくまで対象は宗教です。

風刺はユーモアやウイットで権力を批判してきたフランスの「伝統文化」。本来はジャーナリズム精神と高い芸術性を備えます。カリカチュアとかアイロニーとかいろんな言葉があり、権力に対抗する民衆の力です。日本にはない、フランスが誇るエスプリなのです。

久原　今回の事件を「表現の自由」の問題だけで終わらせることはできません。表現の自由はキリスト教会と、それこそ血で血を洗う戦いを経て手にした基本的人権ですね。そして宗教権力に再び支配されることがないよう国家と教会を厳格に分ける政教分離原則（ライシテ）は、さまざまな宗教の人が共存するための、絶対に譲れない国家原則です。でも、それが火種になった。

トーザン　フランスは同化政策によって、国籍を与えた移民にフランス人と同じ政教分離原則を求めます。この同化政策は完全に失敗だと思う。同じフランス人といっても、居住地や就職で差別があります。疎外感からイスラム教にアイデンティティーを見いだし、政教分離原則も受け入れにくく、中には過激思想に走る人も。でも、大多数の穏健なムスリムと過激派を混同してはなりません。

久原　フランスのムスリム人口は五百万とも七百万ともいわれ、全人口の10％前後も占めますね。ムスリムの痛みに思いをはせ、共生の道を見つけられるのでしょうか。

トーザン　テロリストは、その国のシンボルを狙います。9・11では米国の金融の象徴である世界貿易センタービル、インドネシアのバリ島ではリゾート遊興施設、そしてフランスは表現の自由の象徴である新聞社でした。人口二百万人のパリで、それに近い数の人が参加した「連帯」と表現の自由を訴えたデモでは、ペンとともに一冊の本を持つ人が目立ちました。それはヴォルテールの「寛容論」、表現の自由が生まれるきっかけともいわれる書です。社会の分断を修復し、折り合いを見いだしたいということの表れではないでしょうか。

シャルリエブド紙襲撃テロ　イスラム教の預言者ムハンマドを題材にした風刺画を度々掲載したパリの風刺週刊紙本社に1月7日、イスラム過激派の武装犯が乱入、編集長や風刺画家ら12人を殺害。別の実行犯による警官襲撃とユダヤ食品スーパー襲撃も起き、犯人3人は射殺された。表現の自由や連帯を訴えるデモが各地で起き、移民社会との共存などの課題も突きつけた。